

インゼ様

山刀さんとう 雨人うと

集落の禁忌を破ってしまい、奉られているモノの怒りに触れる。

このような怪談は古典文学にも見られ、現代でもアレンジを加えられ、広く知られた怪談の形態だ。私の読者諸君も一度は見たり聞いたことがあるだろう。

大抵は事情を知らぬ子どもが入ってはいけない社に入ってしまった、○○様の怒りに触れ、対策として村のオガミ屋に助けを求めらう、といった流れになることが多い。今回のエピソードは、とある村で遭遇した人々に恐れ畏怖された存在のお話。

続きはインゼ様の項にて。

「着きましたよ！ 先生！」

車を駐車した白水の声で、私は目を覚ました。長い長旅路の終焉に、私は伸びをしながら運転者を労った。

「ご苦労様、白水ちゃん。疲れたでしょう」

私の担当編集、白水は屈託のない笑顔でかぶりをふる。

「いいえー！ 免許のない先生の足になるくらい、お安い御用ですよ！」

一言余計だが、まあいい。世話になったのは間違いないのだから。

私たちは次の特集の取材のために、中国地方のある村落を訪れた。ここに来るまでの道中、高速道路でドライバーを事故に導く悪霊と一悶着もあったが、無事に辿り着くことができてよかった。

今回取材する村の儀式？ 祭り？ の取材の打ち合わせのため、村の寄り合い所へ向かう。寄り合い所の前には、すでに数名の人物が佇んでいた。

「おーおー、遠いところからよくおいでなすった。私、この村の村長してます、蓮見と申します」

およそ五十台後半から六十代といったところの中年の男性が丁寧に頭を下げた。意外にも、田舎特有の訛りは強くない。隣の壮年の男性は村役場の人間で林という。奥にいる中年の女性は私たちの宿を提供してくれる村の方だ。

白水も彼らに倣い、あいさつと名刺を差し出す。ビジネスの世界で生きる人間として、普段とは打って変わった凛とした姿だ。

私も名乗り、今回の取材の内容を確認した。

この村で数年に一度に執り行われる人形祭。村人には一人一人の健康と安寧を守る。一日目に新しい人形の配布が行われ、二日目に古い人形の供養、最終日の三日

目は村をあげての縁日が行われる。

日程については大まかにこんなところだ。一息に説明し終えた蓮見は、顔に影を湛えながら続けた。

「次に、注意事項についてなんです。絶対に他者の人形を見たり、見せたりしてはいけませんぞ」

一瞬、静寂が寄り合い所の応接間を包んだ。それまで温もりを含んだ蓮見の声に冷気が漂った気がした。

「見たら、どうなるんですか？」

これは私の好奇心だ。好奇心で得た現象は作品の燃料となる。蓮見は、途端にそれまでの声と顔に戻り、

「なに、お叱りを受けることになるだけですな」

ガッハツハと破顔する蓮見に、応接間は再び和やかな雰囲気となった。

「さて、こちらがお二方の人形です。どうぞ記念に」

「ありがとうございます！」

白水は巾着を自分だけ中身が見られるように開き、中を確認した。私もそれに倣う。中身は、裁縫の詳しいことはわからないが、布製の素材で作られた和服を着た童を模した可愛らしい人形だ。

各々自分の人形を見ていた私たちは、頃合いを見計らって宿に向かうことにした。席を外しつつ、私はこっそりと自分の人形をカメラに収めた。

「では、私たちはそろそろ宿屋に向かいたいのですが……」

「そうですね、宿は宇田さんが用意していただけますよ。その前に……」

蓮見はおもむろに彼の携帯を取り出した。

「じゃ、早速 Lnuu 交換しときましょか」

「……はい？」

Lnuu とは、チャットアプリの一種で、この国では全国的に普及しているものだ。最近 Yahoo と経営統合したとかなんとか。

このアプリは他の SNS よりも匿名性が低く、主に家族や親しい友人間で交換するのが一般的だ。例えば、ビジネスの関係である私と白水は交換していない。

回りくどい説明をしたが、つまるところ、今会ったばかりの第一村人 A と交換する代物じゃない。

「Lnuu ですか？」

「そりやそうでしょう。この村ではみんなが家族みたいなものですし、家族なら連絡先の交換はしますでしょ」

私は白水に一瞥を送った。さすがの白水も引き攣った笑みを浮かべるのがやつとといった様相だ。

——私もここまでとは思わなかったんですよ！——

とでも言いたげな、困ったような半泣き半笑いをして
いる。

ここまで距離の近い集落だとは想定外だ。断ろうにも、

後々の取材や数少ない集落の人間との関係の悪化が今後
に及ぼす影響から、私たちは渋々とアカウント交換に
応じた。

「結構使いこなしてるんですね」

皮肉を込めてのセリフだったが、先方には伝わらな
かったようだ。

「なんのなんの。連絡が来るのが楽しみで、通知が来れ
ばすぐに反応してしまいますよ。早速、全体のぐるーぷ
にも入れましたから、早く参加してくださいな」

……これはこちらにも対応のスピードでの返信を求め
ているということだろうか。後々に分かることだが、私
や白水が一度メッセージを送れば、五分と経たずに既読
は数十を超えた。少し怖いくらいだ。取材が終わったら
ブロックと退会だなと決意を固めた。

蓮見とともにいた女性は、私たちに宿を提供してくれ
る宇田という女性だった。恰幅の良い彼女に案内される
まま、彼女が家族で経営している民宿にお邪魔した。

道中では人形祭に向けた準備をしている。皆各々の人
形をしまつてある巾着をどこかに身につけていた。

「本当に誰も人形を他の人には見せないんですか？」
私の興味は人形祭よりも他者の人形を見たらどうなる

かに向いていた。犯してはならない禁忌、という大袈
裟だが、好奇心を刺激されたからには黙っていられない
のが作家の性だろう。

「エーエー誰も見せないし見ようともしませんねえ。な
んせ村の禁を破ったらインゼ様に憑り殺されますからね
え」

聞き慣れない単語が聞こえたが、どうやらこの村に伝
わるナニカがあるようだ。

「インゼ様？」

「まあこの土地では神様みたいなものですね。そんなこ
とよりうちの料理は絶品で……」

インゼ様とやらについてもっと詳しく聞きたかったが、
彼女からしてもあまり詮索されるのはいい気分ではない
ようで、早々に話は切り上げられてしまった。

案内された部屋で少しくつろいだのち、白水は編集部
との別件で席を外した。一人部屋に残された私は――

「よし、見るか」

私は白水の置いていった巾着を手に取り、口をぴつと
開いた。

中身は私の人形と似たり寄ったりな童の人形だった。
服の色が私のと違って橙色ということくらいしか違いが

ないか？

もつとよく調べてみようとする私の人形と白水の人形を袋から出して見比べた。

「うーんやはり特に違いはな——」

「何が、違いはないって？」

ノックもせず姿を現したのは蓮見だった。家族みたいなものって言ってただけに、デリカシーの欠片もない。私はノックくらいしてほしいと抗議しようとしたが、私に背を向けている彼の奇妙な佇まいに、その言葉を飲み込んでしまった。

「先生、あんた、白水さんの人形を見たね？ あれだけ見てはならんと言ったのに！」

「後ろを向いてるのは、私の人形を見ないためですか？」
「今村のもんに連絡して、あんたにヤインゼ様からの罰を受けてもらうからな！」

どうやら気分が昂ると鉛が出るタイプのようだ。

「そのインゼ様ってのは何なんです？」

「よそもんのあんたに話す義理はない！」

さっきまで家族みたいなのって言ってたくせに、禁を破った瞬間これか。

さてどうしたものか。抵抗して逃げるのも手だが、あいにくとインゼ様を私が直接知るいい機会だと思おう自分もいる。

思案している間にあれよあれよと村の衆が集まり、私

は口々に罵られながら高台にある社に連れて行かれた。

「ここで禊を受けてから出てきな！」

バタム、と戸を閉められ、外側から鍵をかけられてしまった。立派な監禁罪だ。だが今の私には好都合。インゼ様を拝むことができるからだ。もつとも、そんなものが存在すれば、だが。

しばらくして何も起こらないようなら、白水でも警察でも連絡すればいい。幸い電波は通っている。

なんて呑気に考えているうちに、辺りが暗くなり始めた。まだ日没には早いはずだが……？

空気が重いと肌で感じられる。ギシ……ギシ……と風もないのに家鳴りが鼓膜を揺らす。何かヤバイ。

どうにかして外に出なければ、という焦燥感とこれから起こることへの好奇心の狭間に揺れていると、私は部屋を中心に信じられないものを見た。

腐ってもモノを書く仕事でご飯を食べている身として、こんな表現しかできないことが読者諸君には申し訳ないのだが、部屋を中心にいた、いや、あったそれは空間に開いた黒い穴だった。

ソレは徐々に収束し、やがて人の形をとるようになって。輪郭がぼやけて正確なものはわからないが、二メー

トルは優に超える長身だ。分かるのは、ソレが明確な悪意を私に向けていることだけだ。

ヒっと空気が喉奥から漏れる。これがインゼ様、か？ ゆらゆらと揺れながらこちらに向かつてくるソレから目を離すことができず、私は壁際まで後退することしかできなかつた。が、抵抗虚しく私は部屋の角にまで追いやられてしまった。

目の前の異形はゆつくりと私の喉元に手を伸ばし、ゆつくりと締め上げ始めた。そこで、私は異形の実体を初めて眼に収めた。

インゼ様の体は、これまで出会った村人の顔で埋め尽くされていた。蓮見、宇田だけではない。私をここまで連れてきた村の人たちの顔までびっしりだ。どの顔にも共通するのは、視線が私で交錯し、親の仇でも見るような視線を刺してくることだ。

インゼ様の正体、それは村人たちの悪意だ。彼らの私に対する嫌悪、憎悪、あらゆる負の感情がインゼ様を作り出している。

インゼ様は私の喉首への圧力を強めていく。全身の村人たちの顔の一つ一つがもはや黒目しか見えない眼光に憎悪を募らせていく。

村の禁忌を破つたのは私だ。その点については私に瑕疵があるのだろう。

でも、あなたたちは他者の命という踏み込んでなら

ないところまで来てしまった。

「お灸を……据え、て……あ、げる」

私はスマホを操作して、村の Linu グループに私の袋の中身を送信した。

数瞬後、まず村長の顔が、次に林の顔が、苦しむような顔つきに変わっていった。瞬く間にインゼ様の全身の顔という顔が眼球の飛び出そうなほど目を見開き、悶え始めた。

咳き込みながら乱れた衣服を直す。ニメートルはあるうかという巨体が、今では細く矮小なものになっている。

どうやら、私からのメッセージをよく確認しないまま開いてくれたようだ。村の禁を破つたのはもはや私だけではない。ならば、この件で私だけに悪意を向けることは筋の通らない話。

私は白水に連絡を入れ、無事に社から出ることができた。命の危機が迫っていたというのに、どこが満足げな自分がいた。

「先生、この間の村の祭り中止になっちゃったけどよかったんですか？」

「ま、いいものは得られたからね」

「先生が満足ならいいですけど」。私はあの祭り見てお

きたかったです」

唇を尖らせる白水には、申し訳ないことをしたな。

あれから村中は半ばパニック状態に陥り、私は、白水を説得して、逃げるように村を後にした。その原因を作ったのは他ならぬ私だ。

あれからあの村がどうなったかは分からない。禁を破ってしまった以上、これまでのような人形祭を開くことはできるだろうか。私には知る由もない。

はつきりと言えることは、人の悪意がより集まり、怪異を成したのがインゼ様という存在であること。ならば、恐れるべきはこの世ならざるものではなく、この世に生きる人間——なのかもしれない。

読者諸君も、注意されたし。特に、第六感を刺激する好奇心には。